

道徳とは何か？ — その研究の変遷と道徳基盤理論の誕生

青山 美樹ⁱ

日本大学大学院 総合社会情報研究科

What is Morality? Transition in Research Regarding the Concept and the Origin of the Moral Foundations Theory

AOYAMA Miki

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Research on human morality began in Ancient Greek times. Discovering what “moral” means is like discovering what makes humans human. This study historically reviewed the academic pursuit of the concept of morality in the fields of philosophy, ethics, education, sociology, ethology, evolutionary biology, developmental psychology, cognitive science, neuroscience, and psychology. Further, this study demonstrated how research in these fields has led to the proposal of the moral foundations theory in the field of experimental social psychology in the United States. The theory, which still attracts much attention, is based on a unique conceptual construct formed with knowledge accumulated from the abovementioned diverse disciplines. It is hoped that this research will be conducive to a deeper understanding of the theory posited in this study as well as a more thorough grasp of the concept of morality from various perspectives through a systematic presentation of different studies, thus stimulating further interdisciplinary research.

1. はじめに

ギリシャ哲学に始まる道徳性の探究は、「人間とは何か」という根本問題を追究するなかで、倫理学、教育学、社会学、動物行動学、人類学、進化学、発達学、生物学、心理学、さらには神経科学にまで至る実にさまざまな学問領域において行われてきた。その変遷のなかで道徳は、魂の姿、ヒトを人間たらしめる要素、正しい行動を導く動機、目指すべき目標、社会で生きるために備わった機能、あるいは社会を維持する規範、といったさまざまな視点でとらえられてきた。近年では、道徳というものが、生得的でありながら文化的影響を受け、かつ多元的であり、複数の要素から説明できるものなのではないかと考えられるようになり、数々の実証研究が行われている。すなわちこれが「道徳基盤理論 (moral foundations theory)」(Graham, Haidt, Koleva, Motyl,

Iyer, Wojcik, & Ditto, 2013) である。

本稿では、この理論に至るまでに積み重ねられてきたさまざまな領域研究を、長い研究史を辿りながら整理することで、その全体としての流れと、この理論の概念が導かれてきた背景をより深く理解することを可能にするとともに、道徳性というものをより実体的にとらえる新たな観点と、さらなる学際研究の拡がりにつながっていくことを目的としている。

2. 「道徳性」をとらえる研究の歴史

2.1 倫理学的観点から

ギリシャ時代、人間が目指すべきは徳や最高善としての幸福であると考えられていた。このような世界の存在論、すなわち形而上学的価値観は、理性の限界を説き、最高善を否定したカントらの批判によって、人倫の形而上学として体系化されていった。

カント (Immanuel Kant) は、行為の目的や結果よりも、善い動機に基づく行為こそが道徳的であり、徳には「善意志」という無条件の動機が備わっていなければならないと考えた。あらゆる人間に備わる理性を自らに課し、それによってなされる自律的な行為だけが道徳的であり、そのための普遍的な法則が道徳法則であるとした。道徳法則は自らの行為の善し悪しを判断する基準あるいは行為そのものの拠り処であり、すなわちこれが道徳であるとした。

カントの思想に大きな影響を与えたとされているルソー (Jean-Jacques Rousseau) の著書『エミール (Émile ou de l'éducation, 1762)』では、「人間の精神の根底には正義と徳との生得的な原理があり、われわれはこの原理に基づき自分の行動と他人の行動の善悪の判断をしている。つまり、われわれは知る前に感じているのであって、良心の現れとは、判断ではなく、感情である。」(中村, 1986) とされた。

一方、カント哲学を批判したのはヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel) であった。人間に備わる傾向性に係わりなく、ひたすら義務に基づく行動だけが道徳的価値となるとするカントの道徳哲学に対し、道徳的な意識と自己の幸福という絶対的な目的は対立し (福德一致のアポリア), 義務の思想 (定言命法) は非現実的であるとした。そのうえで、「相互承認」のみが道徳の本質であり (井藤・高宮・苫野, 2015), これを追究する精神こそが道徳性であると説いた。

2.2 社会学的観点から

一方、道徳を社会的状況における社会現象としてとらえたのが社会学的立場である。

ニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche) は、著書『善悪の彼岸 (Jenseits von Gut und Böse, 1886)』および『道徳の系譜 (Zur Genealogie der Moral, 1887)』のなかで、キリスト教的道徳、すなわちキリスト教に基づく善悪の観念というものを批判し、その価値を「ルサンチマン (怨恨)」という現実に戻元した (作田・井上, 2015)。彼は、それまでの道徳性の考察に批判的な見方が欠けていたと考え、道徳というものが社会の抑圧によって生じる (作田・井上, 2015), ある種の価値であり力でありうるという、社会構造的あるいは政治的な見方によって説明しようとした。

デュルケーム (Émile Durkheim) は、著書『道徳

教育論 (Moral Education, 1925)』のなかで、「規律の精神」「社会集団への愛着」「意思の自律性」を道徳の3要素としてあげ、道徳というものが社会生活の原理から「義務」と「善」という二元論で説明されるものであるとした (江頭, 2007)。これらは社会という同一実在の二側面にありながら、相互に排他的傾向を持ち、異なる文化の一部をなす要素となっているとし、さらに、それらと同型の「聖なるもの」の存在が、社会がその環境に適応するための分化と統合の均衡を保っていると説明された (江頭, 2007)。

ヒューム (David Hume) は、著書『人間本性論 (A Treatise of Human Nature, 1739)』および『道徳原理研究 (An Enquiry Concerning the Principles of Morals, 1751)』のなかで、人間の倫理的判断は、対象そのものに対する理性ではなく、自負 (pride), 自卑 (humility), 愛 (Love), 憎 (hatred) という4つの間接情念が自己や他者に対してもたらす、快・不快の感情が判断の基準となっていると考えた (久保田, 1989)。そのうえで、徳には寛大さや衡平といった傾向にみられる「自然な徳」と、正義や忠誠といった「人為的な徳」があり、いずれも社会の善に向かうことを前提としているとし、これが功利主義の考え方につながったと考えられている (水野, 2015)。

スミス (Adam Smith) は、著書『道徳情操論 (The Theory of Moral Sentiments, 1759)』および『国富論 (An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, 1776)』のなかで、「同感 (sympathy)」をある種の原理として、社会における利己的な自己が、社会規範を内面化し、他者の行為に対して、内在する「公平な観察者」に同感できることにより、自己規制と働きかけによって、内なる常識 (良心) を持った世界として形成されたのが道徳であるとした。そして、この原理が他者を判断する能力にとどまらず、相互の社会的結合を可能にし、多様な価値や動機によって是認されたさまざまな人間集団からなる人間共同体 (星野, 1966) を実現させたと考えられた。

2.3 生態学的観点から

道徳性を、特に人間と社会の力学的な相互作用の結果としてとらえようとしている観点もある。

トリヴァース (Robert L. Trivers) は、人間の利他性を論じるうえで重要な前提となる「互惠性の概念

（互惠的利他現象の理論）」(Trivers, 1971) を提唱した。この概念は、「交換」を原理の柱とし、返報を伴う協力関係が、相互に有益であり、相互に協力し続ける限り安定的で適応的な戦略となりうる、という考え方が前提となっている。信頼だけにに基づき、懲罰という制裁がないとシステムが崩壊するという大きなリスクのなかで、ヒトがこの互惠的利他性を選択してきたのは、ヒトだけが持つ言語を用いたコミュニケーション能力に大きな意味があったと考えられている（長谷川, 2016）。さらに、このメカニズムのなかで信頼や寛容が生み出され（小田, 2017）、それが道德性の進化につながっていったと考えられた。

アレグザンダー（Richard D. Alexander）もまた、人間と社会との相互作用のなかに独自の力学があり、そのなかで生み出されてきたのが道德性であると考えた。彼は、著書『ダーウィニズムと人間の諸問題（Darwinism and human affairs, 1979）』や『道德システムの生物学（The biology of moral systems, 1987）』をとおして、「間接的互惠性」の概念を提唱し（矢島, 2010）、集団における他者との間で交換される恩恵と返報、そしてそれらを変化させる力を持つ評判と地位があると説明した（矢島, 2010）。規則や価値観が内面化した「罪悪感」と、他者がどう思うかの表れである「恥」の意識が、人間の良心において複雑な原理として働いているとし、また集団を支える道德性と、争いや倫理観の衝突とは表裏一体であり、個人と集団の利益が相反するとき、道德という原理が適用されてきたと考えた（ドゥ・ヴァール, 1998）。

2.4 進化学的立場から

進化生物学においては、動物から人間に至る連続性のなかに道德性というある種の能力の発達があったと考えられた（De Waal, 1996 西田・藤井訳 1998）。

ダーウィン（Charles Robert Darwin）は、著書『人間の由来（または、人間の進化と性淘汰；The Descent of Man and Selection in Relation to Sex, 1871）』のなかで、道德性というものが、善悪を見分け、良心に従い行為を規制する能力（内井, 1998）であり、人間が永続的にそれを備えることで種の存続を有利にする自然選択の結果であると考えた。道德性は、ある一つの単純な本質で規定できるものではなく、一群の特質の集まりに還元できるもの（内井, 1998）、すな

わち複合的心性（モジュール）としてとらえられるものであり、その能力あるいは機能の発達において特に重要な意味を持ったのが、「共感」を含む社会的本能であったと説明した（ボーム, 2015）。

ドゥ・ヴァール（Frans de Waal）は、人間に道德性が備わったのは、究極的には社会に受け入れられることが目的であり、そのなかでは「集団の利益」と「自己犠牲」というものが重要であったと考えた（ドゥ・ヴァール, 1998）。あらゆる動物の行動は生存と生殖を目的としており、ヒトは生存競争のなかで互いに助け合う必要が生じ、利己的な本能を超え、社会という場でより大きな協力関係を築くことを可能にする利他的行動をとるようになったのが道德性の始まりであるとした。そして、集団価値、相互援助、内部衝突といったものが原動力となって社会規範を生み出し、そのなかで他者に対する「感情移入」や「共感」といった要素によって道德性が形成されたと考えた（De Waal, 1996 西田・藤井訳 1998）。

ボーム（Christopher Boehm）もまた、道德性がヒトの進化のなかで「社会選択」、すなわち社会への適応のなかで生み出されたある種の能力であると考えた（Boehm, 2012 斉藤訳 2015）。ヒトはグループで行う狩猟、特にその分配において強力な平等主義の秩序を生み出し、それが「良心」獲得のきっかけとなったとした。ヒトは平等主義の社会に順応するためルールと価値観を内面化し、そのなかで「良心」と「羞恥心」という機能と結びつき、善悪の判断にとどまらず、グループの意思決定を誘導し、平等で安全な社会を維持してきた。そして、名誉や誇りという感覚を備えることで遺伝子として蓄積され、さらに進化しつづけていると考えた。これが、ヒトが生まれつき持っていると考えられる、他者を助けようとする協力、支配と服従、支配されることに対する強い憤り、といった傾向であり、それらは生物学的条件と文化的条件によって備わったと説明された。

2.5 発達科学的立場から

道德性を、子どもの認知能力の発達の観点からとらえた研究も数多く行われている。

ピアジェ（Jean Piaget）は、著書『児童道德判断の発達（The moral judgment of the child, 1932）』のなかで、子どもの道德的判断が、経験する社会との関

係性の変化と拡大のなかで、「義務」と「他律」の「拘束の道徳 (morale de la contrainte)」から「善」と「自律」の「協同の道徳 (morale de la cooperation)」に進化するとし (林, 2005), 他律的な価値観から自律的な価値観への変容のプロセスを道徳性発達の推論として説明した。幼い子どもは, 行為の物理的結果に基づき判断する傾向があるが, 子ども同士の対等な関係性のなかで, 意図を視野に入れた判断ができるようになり, 協同作業ができるようになっていく成長過程があり (長谷川, 2018), そこに人間における道徳性の発達が説明できるとした。

コールバーグ (Lawrence Kohlberg) もまた, 道徳性を感情や行動の問題としてではなく, 認知-判断の問題としてとらえようとし (山岸, 1993), ピアジェの理論を検討するかたちで「道徳性発達理論 (Kohlberg's stages of moral development)」をまとめた。彼は, 人間の道徳性が, 関係する社会のなかで慣習にさらされることにより, 慣習以前の前慣習水準から, 慣習水準, 脱慣習 (原則的) 水準 (内藤, 1977; 山岸, 1993) へと進化し, そのなかで道徳的判断の基準は, 罰と従属への志向から, 道具的・相対的志向, 「よい子」対人的一致への志向, 法と秩序への志向, 社会契約的・遵法的志向, そして普遍的倫理原則への志向に至る, 6 つの段階を経て獲得されていくものであると考えた (山岸, 1993)。

2.6 認知科学的立場から

このように, 道徳を人間に備わる認知という機能としてとらえようとする研究も数多く行われている。

トマセロ (Michael Tomasello) は, ヒトと他の動物とを分ける特徴として, 文化的行動と社会制度をあげ, その根底には「協力」するという能力と動機があると考えた。ヒトは, 協力の規範 (道徳規範を含む) と遵守の規範 (制度的規範を含む) に沿ってふるまい, そのなかで, 「われわれ志向 (“we” intentionality)」を持つ個体の集合体として, 共有のゴールを持つ「志向性の共有 (shared intentionality)」 (Tomasello, 2009 橋彌訳 2013) が重要な意味を持ったと説明した。「志向性の共有」とは, すなわち他者と協力するうえで必要な, 意図や約束の「相互承認」を可能にする能力であり, 他者との協働のなかで個体間の接続によって生み出されるという。つま

り, そのプロセスにおいて利他性自体が主要なのではなく, 規範に適応した罪悪感や恥感情といった社会的情動を発達させ, 内面化し, 社会規範としての行動基準あるいは社会的判断を自ら進化させ, 他者と共有してきたことが重要なのであり, 「われわれ」自身が協働してつくりあげた制度的かつ文化的な世界 (Tomasello, 2009 橋彌訳 2013)こそが, ヒトを人間たらしめていると考えた。

テュリエル (Elliot Turiel) は, 人間の社会的道徳判断と志向性を生み出す認知的枠組みとしての「社会的領域」の概念を唱えた (首藤・二宮, 2005)。この「社会的領域理論 (Social Domain Theory)」 (eg. Turiel, 1989) では, 質的に異なる思考をもたらす3つの領域, 「道徳領域 (moral domain)」 「社会領域 (social domain)」 「心理領域 (psychological domain)」を区別し, われわれの社会的判断や意志決定が多元的であることを前提としている (首藤・二宮, 2005)。そのなかで, 道徳的判断は, 社会システムからの影響を受けることなく (長谷川, 2018), 道徳的価値という善悪を規定する普遍的な要素によってのみ動かされるものとしている。

2.7 神経学的立場から

神経科学的研究では, ダマシオら (Koenings, et al., 2007) が報告した, 脳にダメージを受けた脳損傷患者の感情と倫理的判断にかかる変化がよく知られている。腹内側前頭前野という感情に関する脳部位が損傷すると, 異常なまでに功利的な倫理的判断を行うようになった (金井, 2015) という研究である。このことからわかるのは, 人間の倫理的判断には脳の特定の部位が機能として関わっているということである。

ルイスら (Lewis, 2012) の fMRI を用いた研究からは, 倫理的判断にかかわる脳部位の大きさの個人差と, 他者への「共感」の強さ, あるいはどのような倫理観を重視するか, といった性向の個人差との間に相関があることが示された (金井, 2015)。この研究結果からは, 人間の脳構造の大きさから, 倫理的判断を含む, 個人の認知的な傾向性をとらえることができるのではないかと考えられた。

リリングらの研究 (Rilling et al., 2002) やサンフェイらの研究 (Sanfey et al., 2003) からは, 他者に騙されることに対する迅速な反応は, 脳の感情につなが

る特定領域の活性化と関係があることが示され、タビブニアらの研究 (Tabibnia et al., 2008) から、公平さに対して脳の報酬回路が活性化し、不当性に対しては自己制御回路が活性化するという結果が示された。また、ルオらの研究 (Luo et al., 2006) から、危害や残虐さのイメージが、脳の「思いやり／保護 (care)」に関する部位を活性化させることが示され、パーキンソンらの研究 (Parkinson et al., 2011) から、性的な逸脱に関する内容が嫌悪 (disgust) などの感情に関する部位を活性化させていることが示された。

神経科学領域において近年行われている fMRI を用いて認知や感情の働きをとらえようとする手法は、非常に画期的であり、道徳性に関する研究でも、その根拠を示すものとして重要な役割を果たしつつある。

2.8 道徳基盤理論の誕生

近年では、道徳性が人間に生得的に備わる基盤を土台とし、人びとが共同体として生きるうえで必要なものとして形成された枠組みであり、人間が社会における適応として進化してきた機能であるにとらえられるようになってきた。このような流れのなか、米国の実験社会心理学研究において発表されたのが「道徳基盤理論」(Graham et al., 2013) である。

この理論が最も画期的である理由は、この理論によって道徳性というものが観念的なものではなく、実体的なものとしてとらえられるようになったことである。これまで道徳性の概念は、主として哲学的な見方に基づき発展してきたもので、それがいくつかの要素によって説明されうるものであるとしても、実際の機能や動機を踏まえた総合的なとらえられ方はされてこなかった。また、道徳性の教育や発達、進化というものを語るとき、そのとらえようとする概念は必ずしも同様ではなく、明瞭でもなかった。道徳基盤理論は、心理学研究においてかつてなされてきた要素主義的な考え方に基づき、人間の道徳的判断をもたらすいくつかの異なる領域を提案し、これまでさまざまな分野で行われてきた研究結果や理論を根拠として、それらを説明しようとしている。

3. 道徳基盤理論とは何か

3.1 道徳基盤理論の提案

道徳基盤理論は、心理学的視座に、人類学、進化

学、発達学、社会学、倫理学、動物行動学、等の知見を加味させて構築した理論であり、人間の道徳的判断に関する 4 つの主張に基づいている。それらは、「生得性」「文化的学習」「直観性」「多元性」である。

生得性 道徳基盤理論において生得性は、「経験より前に準備されていること」と定義されている。マーカス (Marcus, 2004) は、「本性が最初の草稿を提供する、そしてそれは経験によって書き換えられる」と述べた。サルや人間を含む動物が持つ、ヘビを恐れやすい傾向性 (DeLoache & LoBue, 2009) や、苦みを避け甘味を選好する傾向性 (長谷川, 2018)、生まれたばかりの子どもが、初めて聞く言語よりも母親が話す言語をより注意深く聞こうとしたり (長谷川, 2018)、無償で他者を助けたりする傾向性 (長谷川, 2018)、また、子どもに、不公平な扱いを受けたときに生じた怒りや執着心を、仕返しに向けるよりも、敵を愛するように教えるほうがはるかに難しい (Graham et al., 2013) といった傾向性があることがわかっている。道徳基盤理論では、道徳性をこうした傾向性と同様のものとしてとらえ、人間の多様な社会的課題を迅速かつ効果的に解決するための認知的適応として進化してきた (Tooby & Cosmides, 1992; Pinker, 1997) メカニズムであると考えている。そして、舌が甘味を感じたとき脳が快感情をもたらすように、公平な交換が快感情をもたらし、不公平感が不快感情をもたらすような知覚モジュールがあり、そこには快・不快という感情あるいは情動が重要な役割を果たしていると考えられているのである。

文化的学習 道徳基盤理論では、道徳性が生得的なものであると同時に、環境に強く影響されるものでもあると考えられている。人間は他者に共感し、他者を助ける傾向性を持って生まれてくるが、成長とともに、他者との相互作用を通じて、また社会におけるさまざまな制度を通して、その道徳性はより多様で複雑なものになっていくと考えられている。スパーバー (Sperber, 2005) の鳥の歌学習 (Marler, 1991) にみられるような「学習モジュール」機能は、人間の成長とともにより多くのモジュールを生むための「学習本能」であると考えられた。同様に、人間に生得的に備わる道徳の基盤は、それが出来上がった道徳性なのではなく、その具体的な判断基準は、

環境および文化がつくりあげていく、というのが道徳基盤理論の主張である。道徳性の普遍的かつ不完全な最初の草稿は、特定の文化的背景や習慣のなかで書き込まれ、書き換えられ、それによって子どもは新しい知識や考え方、行動パターンなどを獲得し、実際の経験を通して基盤を上手く活用できるようになる (Graham et al., 2013)、と考えられている。

直観性 道徳基盤理論ではまた、道徳性が直観によってもたらされていると考え、道徳的直観を「意識状態、あるいは意識の辺境で突然出現する、検索、考察、推論の段階を経て結論づけられたという意識的な自覚が全くない、他者の性質や行動についての好・嫌、善・悪といった評価的な感覚」と定義 (Haidt & Bjorklund, 2008, p.188, modified from Haidt, 2001, in Graham et al., 2013) している。この主張は、ハイト (Haidt, 2001; Haidt, 2012 高橋訳 2016) が提案した道徳的判断の社会的直観モデル (social intuitionist model; SIM) がベースとなっている。「直観は、道徳的な判断の主要な源泉であり、一般に思考は、あとから理由づけを行うために道徳的な判断に続いて起こる」とするヒューム (Hume, 1960; 1969) のモデルに基づき (Haidt, 2012 高橋訳 2016)、これに第三者の判断や思考といった社会関係の影響を加味したものである。道徳的判断はある種の認知プロセスと考えられ、そのなかで重要なことは、それが情動を含む「直観」と、理性的な「思考」の二つの異なる認知能力のあいだにあるということである。つまり、直感は思考ではなく、認知の一部であり、人間の心を動かしているのは、原理に基づく論考よりも、より感性による判断に近く、その迅速かつ自動的なプロセスにほかならないと考えられている。そして、この直観は、文化的背景のなかで発達し、形成されるものであり、その後続く思考や関心によって修正されたり、異なる方向に導かれながらも、その源流は共通の概念、すなわち普遍的な観念としてとらえられると説明されている。

多元性 道徳基盤理論では、道徳性というものが、人間の進化の過程で繰り返し発生したさまざまな社会的課題を解決するなかで、複数のモジュールという生来的な精神構造として形成されたものと考えられている。道徳基盤理論では、それらを道徳基盤と

呼び、それぞれの基盤が活動する対象領域を道徳基盤領域と呼んだ。そして、それぞれの適応的課題から形成された異なる道徳的判断領域があると仮定され、道徳性というものが一元的なものではなく、多元的なものである、というのが道徳基盤理論のもう一つの主張である。現在、道徳基盤理論のなかで提案されているのは、「保護 (Care) / 危害 (Harm)」「公正さ (Fairness) / 欺瞞 (Cheating)」「内集団への忠誠 (Loyalty) / 裏切り (Betrayal)」「権威への敬意 (Authority) / 破壊 (Subversion)」「神聖さ (Sanctity) / 墮落 (Degradation)」「自由 (Liberty) / 抑圧からの解放 (Oppression)」の6つの道徳基盤領域である。

3.2 道徳基盤の基準と根拠

道徳基盤理論では、道徳基盤を規定する基準を定めている。道徳基盤は、それぞれが形成された「適応的課題 (Adaptive challenge)」「根源的誘因 (Original triggers)」「習慣的誘因 (Current triggers)」「特徴的な感情 (Characteristic emotions)」「関連する善行 (Relevant virtues)」の5つの要因によって説明され、さらに「一般化された規範的基準 (Common in third-party normative judgments)」「無意識の情動的評価 (Automatic affective evaluations)」「文化的広汎性 (Culturally widespread)」「生得的具有の根拠 (Evidence of innate preparedness)」「進化的モデル (Evolutionary model)」の5つの基準に基づき、さまざまな研究から得られた知見を根拠として提案されている。しかし、現在提案されている6つの基盤は最終的に結論づけられたものではなく、今後の研究の発展により変わる可能性があると説明されている。

3.3 現在提案されている6つの道徳基盤

保護／危害 (Care/Harm; 以下、Care という) の基盤は、「我が子を保護し世話することで苦しみや飢えから守る」という適応的課題と根源的な誘因から獲得されてきたと考えられている。他者の苦痛をいち早く知覚し、保護に結びつけるモジュールを獲得することで、個体における種の存続を有利にし、種族としての競争力をも高めることができたと考えられた。現実社会では、人を殺したり、傷つけたり、苦痛を与えることはいけない、という基本的な道徳感情 (金井, 2013) であるとされる。他者への思いやりや共感といった感情に基づいていると考えられ、弱

者に対する同情や、危害をもたらす者への怒りとしても表されるとされている。文化的には、例えば仏教文化のなかでは、この基盤に関連づけられる「徳」や「善」が特に高く評価され、個体のなかに同化されていると考えられている (Graham et al., 2013)。

公正さ／欺瞞 (Fairness/Cheating; 以下, Fairness という) の基盤は、「相互協力の恩恵に不利益をもたらす不正や欺瞞をいち早く見分け、排除する」という適応的課題と根源的な誘因から獲得されてきたと考えられている。あらゆる社会的動物は非ゼロサムの交換と関係性の維持に常に直面し (Graham et al., 2013), そのなかで不正や欺瞞をいち早く察知するモジュールを獲得することで、個体の優位性を高めることを可能にしたと考えられている。現実社会では、正義や信頼を欺いたり比例配分における不公平や不平等をもたらす者には因果応報が望まれ、罰が与えられるべき、と考える道德感情であるとされる。金井 (2013) は「公正さ」と「平等さ」は本来区別されるべき理念であるとし、ハイト (Haidt, 2012 高橋 2016) も後にこの定義を修正し、「平等さ」は比例配分の考え方に基づく分配の公平さであるとした。

内集団への忠誠／裏切り (Loyalty/Betrayal; 以下, Loyalty という) の基盤は、「集団への脅威に対処するため結束し、これを維持する」という適応的課題と根源的な誘因から獲得されてきたと考えられている。人間以外の霊長類が、階層や支配をめぐる群れの内外との争う (de Waal, 1982) のと同様に、人間においても生き残りをかけた部族や集団間の争いを経て、争いに有利となる結束力の高い集団を維持するべく、先ず個体の機能が働くことで、個体を勝ち組の一員として残しやすくする (Graham et al., 2013), と考えられた。現実社会では、自分が属する集団のなかで義務を全うし貢献することを重要と考える道德感情であり、国家や会社、チーム等に対する誇りや忠誠として表されるとともに、規範を破った裏切者には制裁として表されることもであるとされている。

権威への敬意／破壊 (Authority/Subversion; 以下, Authority という) の基盤は、「階層制社会のなかで有利な協力関係を形成する」という適応的課題と、根源的な誘因から獲得されてきたと考えられている。多くの霊長類は階層 (ヒエラルキー) に基づき集団

を維持しており、その複雑な社会の関係性のなかで、上下との有益な関係を築き、階層を上手く操ることができるようなセンスを有する個体は、適切に反応したり感知できない個体に比べて有利であった (De Waal, 1982; Fiske, 1991) と考えられている。現実社会では、社会的秩序のためには上下関係が尊重され、階級や地位により分相応に振る舞うことが重要と考える道德感情であり、警察や裁判所といった社会的権威や、会社の社長や上長、家庭の家長といった権限ある立場に対して表されるもので、畏敬や恐れといったかたちで表されることもあるとされている。

神聖さ／墮落 (Sanctity/Degradation; 以下, Sanctity という) の基盤は、「さまざまな汚染環境から集団を防御し、病や死をもたらすと考えられる危険を忌避する」という適応的課題と根源的な誘因から獲得されてきたと考えられている。免疫システムのような、経験に先立つ反応を即座に生起させる機能を持つ個体は、一つ一つの事象を個々に判断しなければならない個体よりも有利であったと考えられた (Graham et al., 2013)。現実社会では、異質な食物や性を禁忌し、貞節や欲望を節制することに価値を置く道德感情であるとされている。特徴的な「嫌悪 (Disgust)」の感情は、強力な適応的課題に対する一つの適応としてとらえられ (Oaten, Stevenson & Case, 2009; Rozin, Haidt, & McCauley, 2008), 嫌悪や行動の免疫システムは、入植者や性的異常者といった新しい課題に対して道徳的反応を強化していった (Faulkner, Schaller, Park, & Duncan, 2004; Navarrete & Fessler, 2006; Rozin, Haidt & McCauley, 2008) と考えられている。また、肉体的・精神的な「穢れ」を忌避する価値観からも、この基盤が宗教的価値観とも深く関わっていると考えられ、特に神道や仏教にみられる自制や清浄さといった徳を追究する精神文化のなかでは、より高い価値が置かれていると考えられている。

自由／抑圧からの解放 (Liberty/Oppression; 以下, Liberty という) の基盤は、「常に支配と抑圧の動機を持つ個体の本性に対抗し、平等を維持する」という適応的課題と根源的な誘因から獲得されてきたと考えられている。ボーム (Boehm, 1999) は「人間は階層制に向かう生得的な傾向を持っているが、長い進化の過程で、グループを支配しようとする覇権者

を集団で統制することで、平等を維持しようとするようになった」と考えている。支配と抑圧の試みを察知し、それに対する怒りの感情を生起させる機能を獲得する (Graham et al., 2013) ことで、集団における平等性を確保しやすくし、集団を安定的に維持することを可能にしたと考えられている。現実社会では、不当な権力の濫用や専制の一線を踏み越えようとする者の兆候を察知し、反抗体制を築こうとする、怒りを伴う道徳感情であるとされている。

3.4 道徳基盤理論の構成概念を測る 2 つの尺度

道徳基盤理論の構成概念、すなわち、道徳的判断における Care, Fairness, Loyalty, Authority, Sanctity の 5 つの異なる道徳基盤領域を測る尺度として提案されているのが、モラル・ファンデーションズ・クエスチョネア (Moral Foundations Questionnaire; 以下, MFQ という) (Graham, Nosek, Haidt, Iyer, Koleva & Ditto, 2011; 金井, 2013) と、道徳基盤不可侵領域尺度 (Moral Foundations Sacredness Scale; 以下, MFSS という) (Graham & Haidt, 2011; 青山, 2016) である。MFQ は、5 つの道徳的基盤に基づく、理論的な道徳的原理に対する是認の度合いを自己評価させるものである。MFSS は、5 つの道徳的基盤領域を侵害 (道徳的逸脱) することに対して支払われるべき代償の大きさ (自己意欲の度合い) を金額に換算させるものである。そしてこれらから、人間の善悪判断が複数の異なる活動からもたらされ、異なる道徳的判断がなされている、ことが示されると考えられている。

3.5 道徳基盤理論と政治的志向

道徳基盤理論において、もっとも広範かつ多くの標本から得られた知見としてあげられるのは、道徳基盤と政治的志向の関係である。Care, Fairness, Loyalty, Authority, Sanctity の 5 つの道徳基盤のうち、Care と Fairness の 2 つの基盤は「個人の尊厳」にかかわる上位概念として、Loyalty, Authority, Sanctity の 3 つの基盤は「義務などへの拘束」にかかわる上位概念としてまとめられ (金井, 2013), 前者には、政治的志向としてのリベラル派がより高い価値をおき、後者には保守派がより高い価値をおく傾向がみられた。そして、それらは国や文化的背景を超え安定した傾向として現れているとされている。

3.6 道徳基盤理論における議論

2013 年に発表された道徳基盤理論は、それが完成された理論ではなく、さまざまな検証や新たな提案によって固められていくことが望まれている理論であるとされている。一方、道徳基盤理論の提案に対してはさまざまな議論もある。

生得性についての議論は、その提案が、遺伝学、神経生物学、発達心理学といった学問からの根拠によって“支えられ、あるいは少なくともそれらの学問間で合意に至って”いるべきである (Suhler and Churchland, 2011) とする指摘に代表される。グラハムら (Graham et al., 2013) は、特定の遺伝子や脳回路の発見が心理学研究の責任とは考えていないとしながらも、基盤とは何であるのか、生得的であるとはどのようなことか、ということをも、より具体的な論拠をもって説明する必要があるとした。

文化的な学習についての議論は、Care と Fairness に関する意識の構築において、文化的な学習の役割が誇張されているのではないかと (Turiel, Killen, and Helwig, 1987), といったものである。しかし、文化的な学習が道徳性の発達的一面にあることを疑う者はおらず、この提案に根本的な議論はないといえる。

直観性についての議論は、道徳基盤理論が道徳性の最初の道徳的判断にこだわりすぎて、経験にともなう道徳性の発達や改善によるプロセスに十分に焦点が当てられていない、とするナルバエス (Narvaez, 2008; 2010) の指摘に代表される。グラハムら (Graham et al., 2013) は、人間の文化的発達と、それによってなされる道徳性の改訂プロセスを踏まえ、道徳的態度としての側面も説明できるとしている。

多元性についての議論は、あらゆる道徳的判断が Care/Harm に基づく一つの精神的プロセスからもたらされるとする (Harris, 2010; Gray et al., 2012) 一元論に代表される。Graham et al. (2013) は、なぜ嫌悪の感情が道徳的判断をより厳しくするのか (Schnall et al., 2008), なぜ Care と Sanctity の認知過程は道徳的判断において異なっているのか (Young & Saxe, 2011), なぜ人間の道徳的判断は害が小さい (Tannenbaum, Uhlmann, & Diermeier, 2011), あるいは無害な (Inbar, Pizarro, & Cushman, 2012) 場合でさえ道徳的行動を生み出せるのか、といった問いに対し、一元論では答えることができないとした。

また、もう一つ重要な議論としてあげられるのが、道徳と社会的慣習の区別である。Care と Fairness は、いかなる時や場所においても道理にかなった道徳であるが、Loyalty, Authority, Sanctity は、ある時や場所によって異なる評価がなされる、単なる因習的なものではないか (Turiel, 1979; 1983; Jost, 2009), また、Loyalty, Authority, Sanctity の 3 つの基盤が常に集団水準で働いているが、Care や Fairness は個体水準で働いている (Janoff-Bulman, & Sheikh, 2012), といった重要な指摘もある (Graham et al., 2013)。

その他にも、Care と Fairness の概念の混合の可能性や、Loyalty と Authority の区分への疑問 (Iyer, 2009) など、数多くの議論がいまなお続いている。

3.7 道徳基盤理論から期待されること

道徳基盤理論は、ひとびとの道徳的価値を予測する実践的かつ実用的な理論であり、さまざまな研究を積み重ねていくことでより洗練されていくことが目指されている。この理論の発展が、学際研究においてさらなるインパクトを与え、さまざまな研究を支え、人間の理解をより深く、より具体的なものとするための理論となり得ると考えられている。特に、潜在的社会的認知、発達、文化・社会生態学、対人的道徳性、道徳的態度、といった研究分野の発展は、道徳基盤理論の発展とともにあるといえ、さらに、道徳基盤理論の概念尺度を用いた研究は、公共政策 (Oxley, 2010) や、政治学 (Jones, 2012), メディア研究 (Tamborini, 2011), マーケティング (Winterich, Zhang, & Mittal, in press), といった分野にまで広がりをみせている (Graham et al., 2013)。道徳基盤理論は、社会における人間のあるべき在り方を理解するために、さらに発展していくことが期待されている。

4. おわりに

われわれは、「道徳とは何か?」という問いに対する答えを探しつづけている。善悪の判断は、人間の道徳性の一つの側面にすぎない。世界のなかで解決すべき問題は自己であり、そして社会である (Graham et al., 2013)。われわれはこの世界におけるさまざまな問題を解決するため、適応し、複雑なメカニズムを進化させ、それによって社会に生きる文化的な生き物として、われわれ自身を人間たらしめ

てきたのである (Graham et al., 2013)。

人間の道徳性というものが、複数の異なる進化的プロセスによって、多様な精神システムとして生得的に備わってきたという考え方は、既に広く受け入れられている (e.g., de Waal, 1996; Ridley, 1996; Joyce, 2006; Wright, 1994) とされている (Graham et al., 2013)。今日、道徳基盤理論をはじめとするさまざまな仮説が、より具体的かつ実体的に道徳性というものの姿をとらえ、その複雑で個別的な働きを、領域を超えた多角的な視座で検証していくことが求められている。そのなかで道徳基盤理論は、人間の存在を理解するための大胆なアプローチと、壮大な議論の場を提供したといえるのではないだろうか。

引用文献

- 青山美樹 (2016). 道徳的基盤に関する調査票の日本語版の作成と妥当性および信頼性の検討 日本大学大学院総合社会情報研究科修士論文 (未公開) .
- Alexander, R. D. (1979). *Darwinism and human affairs*. Seattle: University of Washington Press.
- (アレグザンダー, R. D. 山根正気・牧野俊一 (訳) (1988). *ダーウィニズムと人間の諸問題* 新思索社)
- Alexander, R. D. (1987). *Foundations of human behavior: The biology of moral systems*. Hawthorne, NY, US: Aldine de Gruyter.
- Boehm, C. (1999). *Hierarchy in the forest: The evolution of egalitarian behavior*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Boehm, C. (2012). *Moral origins: The evolution of virtue, altruism, and shame*. New York: Basic.
- (ボーム, C. 斉藤隆央 (訳) (2015). *モラルの起源—道徳, 良心, 利他行動はどのように進化したのか* 白揚社)
- Darwin, C. (1871). *The descent of man and selection in relation to sex*. UK: John Murray.
- (ダーウィン, C. 長谷川眞理 (訳) (1999). *人間の進化と性淘汰* 文一総合出版)
- DeLoache, J. S., & LoBue, V. (2009). The narrow fellow in the grass: Hunan infants associate snakes and fear. *Developmental Science*. 12(1), 201-207.
- De Waal, F. (1982). *Chimpanzee politics: Power and sex*

- among apes. London: Jonathan Cape.
- De Waal, F. B. M. (1996). *Good natured: The origins of right and wrong in humans and other animals*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- (ドゥ・ヴァール, F. 西田利貞・藤井留美 (訳) (1998). 利己的なサル, 他人を思いやるサル—モラルはなぜ生まれたのか 草思社)
- Durkheim, E. (1925). *Moral Education*, Free Press.
- (デュルケム, E. 麻生誠・山村健 (訳) (1964). 道徳教育論 明治図書出版)
- 江頭大蔵 (2007). デュルケム道徳論における「義務」と「善」の関係について 広島法学, 31, 2, 21-42.
- Faulkner, J., Schaller, M., Park, J. H., & Duncan, L. A. (2004). Evolved disease-avoidance mechanisms and contemporary xenophobic attitudes. *Group Processes & Intergroup Relations*, 7, 333-353.
- Fiske, A. P. (1991). *Structures of social life: The four elementary forms of human relations: Communal sharing, authority ranking, equality matching, market pricing*. New York: Free Press.
- Graham, J., & Haidt, J. (2011). Sacred values and evil adversaries: A Moral Foundations approach. In . Shaver & M. Mikulincer (Eds.), *The Social Psychology of Morality: Exploring the Causes of Good and Evil*. New York: APA Books.
- Graham, J., Haidt, J., Koleva, S., Motyl, M., Iyer, R., Wojcik, S. P., & Ditto, P. (2013). Moral Foundations Theory: The Pragmatic Validity of Moral Pluralism. *Advances in Experimental Social Psychology*, 47, 55-130.
- Graham, J., Nosek, B. A., Haidt, J., Iyer, R., Koleva, S., & Ditto, P. H. (2011). Mapping the moral domain., *Journal of Personality and Social Psychology*, 101(2), 366-385.
- Gray, K., Young, L., & Waytz, A. (2012). Mind perception is the essence of morality. *Psychological Inquiry*, 23, 101-124.
- Haidt, J. (2001). The emotional dog and its rational tail: A social intuitionist approach to moral judgment, *Psychological Review*, 108 (4), 814-834.
- Haidt, J. (2012). *The righteous mind: Why good people are divided by politics and religion*. New York: Pantheon.
- (ハイト, J. 高橋洋 (訳) (2016). 社会はなぜ左と右に分かれるのか 対立を超えるための道徳心理学 紀伊國屋書店)
- Haidt, J., & Bjorklund, F. (2008). Social intuitionists answer six questions about moral psychology. In W. Sinnott-Armstrong (Ed.), *Moral Psychology, Volume 2: The Cognitive Science of Morality: Intuition and Diversity* (pp.181-217). Cambridge, MA: MIT Press.
- Harris, S. (2010). *The moral landscape: How science can determine human values*. New York: Free Press.
- 長谷川真里 (2018). 子どもは善悪をどのように理解するのか?—道徳性発達の探究 ちとせプレス
- 長谷川真理子 (2016). 進化心理学からみたヒトの社会性 (共感) 認知神経科学, 18, 3・4.
- 林泰成 (2005). 道徳教育における他律から自律への発達図式についての哲学的検討 上越教育大学研究紀要, 25, 1, 271-284.
- 星野彰男 (1966). アダム・スミスの道徳と経済(二) 一橋論叢, 55, 6, 861-867.
- Hume, D. (1739). *A Treatise of Human Nature*. Oxford: Clarendon Press.
- (ヒューム, D. 大槻春彦 (訳) (1948). 人性論 岩波文庫)
- Hume, D. (1751). *An Enquiry Concerning the Principles of Morals*. London: A. Millar.
- (ヒューム, D. 松村文二郎・弘瀬潔 (訳) (1949). 道徳原理の研究 春秋社)
- Inbar, Y., Pizarro, D. A., & Cushman, F. (2012). Benefiting from misfortune: When harmless actions are judged to be morally blameworthy. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 38, 52-62.
- 井藤元・高宮正貴・苫野一徳 (2015). 道徳の本質および道徳教育への示唆—J. S. ミル, ヘーゲル, シュタイナーの視点から— 大阪成蹊大学紀要, 1.
- Iyer, R. (2009). What are the basic foundations of morality? Retrieved August 24, 2018 from <http://www.polipsych.com/2009/11/13/what-are-the-basic-foundations-of-morality/>.
- Janoff-Bulman, R., & Sheikh, S. (2012). The forbidden, the obligatory, and the permitted: Moral regulation and political orientation. Paper presented to the Society for Personality and Social Psychology annual conference, San Diego, CA.

- Jost, J. T. (2009). Group morality and ideology: left and right, right and wrong. Paper presented to the Society for Personality and Social Psychology annual conference, Tampa, FL.
- Joyce, R. (2006). *The evolution of morality*. The MIT Press.
- 金井良太 (2013). 脳に刻まれたモラルの起源一人はなぜ善を求めるのか 岩波書店
- Koenings, M., Young, L., Adolphs, R., Tranet, D., Cushman, F., Hauser, M., & Damasio, A. (2007). Damage to the prefrontal cortex increases utilitarian moral judgements, *Nature*, 446, 908-911.
- 久保田顕二 (1989). ヒュームにおける情念と道徳, 哲学雑誌, 104, 776, 19-35.
- Lewis, G., Kanai, R., Bates, T. & Rees, G. (2012). Moral values are associated with individual differences in regional brain volume, *Journal of Cognitive Neuroscience*, 24, 1657-1663.
- Luo, Q., Nakic, M., Wheatley, T., Richell, R., Martin, A., & Blair, R. J. (2006). The neural basis of implicit moral attitude - An IAT study using event-related fMRI. *Neuroimage*, 30, 1449-1457.
- Marler, P. (1991). The instinct to learn. In S. Carey & R. Gelman (Eds.), *The epigenesis of mind: Essays on biology and cognition*. Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Marcus, G. (2004). *The birth of the mind* (p.34,40). New York: Basic.
- 水野俊誠 (2015). ヒューム道徳論と功利主義: ヒュームは功利主義者か? エティカ, 8, 45-89.
- 中村博雄 (1986). カント道徳論に対するルソーの影響 哲学, 36, 152-162.
- 内藤俊史 (1977). Kohlberg の道徳性発達理論 教育心理学研究, 25, 1, 60-67.
- Narvaez, D. (2008). The social-intuitionist model: Some counter-intuitions. In W. A. Sinnott-Armstrong (Ed.), *Moral Psychology, Vol. 2, The Cognitive Science of Morality: Intuition and Diversity* (pp. 233-240). Cambridge, MA: MIT Press.
- Narvaez, D. (2010). Moral complexity: The fatal attraction of truthiness and the importance of mature moral functioning. *Perspectives on Psychological Science*, 5, 163-181.
- Navarrete, C. D., & Fessler, D. M. T. (2006). Disease avoidance and ethnocentrism: The effects of disease vulnerability and disgust sensitivity on intergroup attitudes. *Evolution and Human Behavior*, 27, 270-282.
- Nietzsche, F. W. (1886). *Jenseits von Gut und Böse*, (ニーチェ, F. W. 木場深定 (訳) (1970). 善悪の彼岸 岩波文庫)
- Nietzsche, F. W. (1887). *Zur Genealogie der Moral*. (ニーチェ, F. W. 木場深定 (訳) (1964). 道徳の系譜 岩波文庫)
- Oaten, M., Stevenson, R. J., & Case, T. I. (2009). Disgust as a disease avoidance mechanism. *Psychological Bulletin*, 135, 303-321.
- 小田亮 (2017). 豊かな生き方, 豊かな社会を考える 利他性の光と影 (500 号記念特別号) TASC monthly, 500, 15-21.
- Parkinson, C., Sinnott-Armstrong, W., Koralus, P. E., Mendelovici, A., McGeer, V., & Wheatley, T. (2011). Is morality unified? Evidence that distinct neural systems underlie moral judgments of harm, dishonesty, and disgust. *Journal of Cognitive Neuroscience*, 23, 3162-3180.
- Piaget, J. (1932). *The moral judgment of the child*. London: Routledge & Kegan Paul.
- (ピアジェ, J. 大伴 茂 (訳) (1977). 臨床児童心理学 3 児童道徳判断の発達 同文書院)
- Pinker, S. (1997). *How the mind works*. New York: Norton.
- Ridley, M. (1996). *The origins of virtue*. Harmondsworth, UK: Penguin.
- Rilling, J. K., Gutman, D. A., Zeh, T. R., Pagnoni, G., Berns, G. S., & Kilts, C. D. (2002). A Neural Basis for Social Cooperation, *Neuron*, 35, 395-405.
- Rozin, P., Haidt, J., & McCauley, C. R. (2008). Disgust. In M. Lewis & J. M. Haviland-Jones (Eds.), *Handbook of emotions 2nd ed.*, (pp.637-653).
- Rousseau, J. J. (1762). *Émile, ou De l'éducation*. (ルソー, J. J. 今野一雄 (訳) (1963). エミール (上) (中) (下) 岩波文庫)
- 作田啓一・井上俊 (編著) (2015). 命題コレクション 社会学 筑摩書房
- Sanfey, A. G., Rilling, J. K., Aronson, J. A., Nystrom, L. E., Cohen, J. D. (2003). The Neural Basis of

- Economic Decision-Making in the Ultimatum Game, *Science*, 300, 1755-1758.
- Schnall, S., Haidt, J., Clore, G. L., & Jordan, A. H. (2008). Disgust as embodied moral judgment. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 34, 1096-1109.
- 首藤敏元・二宮克美, (2005). 多面的領域としての“個人道徳”の概念とその心理学的研究の展望 埼玉大学紀要, 54, 1, 23-39.
- Smith, A. (1759). *The Theory of Moral Sentiments*. Strand & Edinburgh: A. Millar; A. Kincaid & J. Bell.
(スミス, A. 米林富男 (訳) (1969). 道徳情操論 未来社)
- Smith, A. (1776). *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. London: W. Strahan & T. Cadell.
(スミス, A. 大河内一男 (訳) (1978). 国富論 中公文庫)
- Sperber, D. (2005). Modularity and relevance: How can a massively modular mind be flexible and context-sensitive? In P. Carruthers, S. Laurence, & S. P. Stich (Eds.), *The Innate Mind: Structure and Contents, Volume 1* (pp. 53-68). New York: Oxford University.
- Suhler, C. L., & Churchland, P. (2011). Can innate, modular “foundations” explain morality? Challenges for Haidt’s moral foundations theory. *Journal of Cognitive Neuroscience*, 23 (9), 2103-2116.
- Tabibnia, G., Satpute, A. B., & Lieberman, M. D. (2008). The sunny side of fairness: Preference for fairness activates reward circuitry (and disregarding unfairness activates self-control circuitry). *Psychological Science*, 19, 339-347.
- Tannenbaum, D., Uhlmann, E. L., & Diermeier, D. (2011). Moral signals, public outrage, and immaterial harms. *Journal of Experimental Social Psychology*, 47, 1249-1254.
- Tomasello, M., Dweck, C., Silk, J., Skyrms, B., Spelke, E. S., & Chasman, D. (2009). *Why We Cooperate*. Boston Review Books, The MIT Press.
(トマセロ, M. 橋彌和秀 (訳) (2013). ヒトはなぜ協力するのか 勁草書房)
- Tooby, J., & Cosmides, L. (1992). The psychological foundations of culture. In J. J. Barkow, L. Cosmides & J. Tooby (Eds.), *The adapted mind: Evolutionary psychology and the generation of culture* (pp. 19-136). New York: Oxford.
- Trivers, R. L. (1971). The evolution of reciprocal altruism. *Quarterly Review of Biology*, 46, 35-57.
- Turiel, E. (1979). Distinct conceptual and developmental domains: Social-convention and morality. *Nebraska Symposium on Motivation*. Lincoln, NE: University of Nebraska Press.
- Turiel, E. (1989). Domain-specific social judgments and domain ambiguities. *Merrill-Palmer Quarterly*, 35, 89-114.
- Turiel, E., Killen, M., & Helwig, C. C. (1987). Morality: Its structure, function, and vagaries. In J. Kagan & S. Lamb (Eds.), *The emergence of morality in young children* (pp. 155-243). Chicago: University of Chicago Press.
- 内井惣七 (1998). 道徳起源論から進化倫理学へ 哲學研究, 566, 17-47.
- Wright, R. (1994). *The moral animal*. New York: Pantheon.
- 矢島壮平 (2010). 道徳判断の機能について—進化的互恵性概念からの一仮説 (Philosophy of Biology, Vol. 2) 哲学研究論集, 6, 67-80.
- 山岸明子 (1993). コールバーグの道徳性発達理論—発達心理学の立場から— 法社会学, 45, 121-125.
- Young, L., & Saxe, R. (2011). When ignorance is no excuse: Different roles for intent across moral domains. *Cognition*, 120, 202-214.

(Received: September 30, 2018)

(Issued in internet Edition: November 1, 2018)

ⁱ 本論文を作成するにあたり、熱心にご指導賜りました田中堅一郎教授に心より感謝申し上げます。